

意味論再考

——意味論-語用論論争を通して——

青山晋也
京都大学

本ワークショップの目的は、意味論-語用論論争を通して、発話の解釈における意味論の役割を再考することにある。ここでいう「意味論-語用論論争」とは、意味論的に決定される内容などなく、すべては語用論的にしか決定されない、と主張する意味論排斥派と、それに対し、意味論的内容と呼べるものを確保しようとする意味論擁護派とのあいだの論争のことを指す。「意味論」という概念は、重要なものとして流通してはいるが、それが正確にはどのような働きをしているかについては同意がない。特に上記の意味論排斥派は、「意味論」には実体が無く、「語用論」に取って代わられるべきだ、とまで主張する。本ワークショップは、こうした意味論排斥派からの主張をいかに受け止めるべきかを考察し、意味論はどのようなものとして存在し、機能しているかを探る。

本ワークショップは、意味論の存否を巡る論争に対し、(1) デイヴィッドソンの真理条件意味論、(2) 意味の使用説、(3) 形式意味論、という三つの観点からアプローチする。まず第一発表では、これまでに行われてきた意味論-語用論論争を概観し、意味論擁護派と意味論排斥派がそれぞれ展開する主張、そして両派のあいだで争われている点を明確にする(大川)。第二発表では、そうした既存の意味論-語用論論争の枠組みの外側から論争を捉え直す試みとして、Davidson的立場からの意味論と語用論の関係を提示する(青山)。第三発表では、意味論排斥派に結びつけられがちな使用説においても意味論と語用論の区別は残ると主張し、またその使用説から帰結する意味論を描き出す(山田)。第四発表では、発話を受け取る際に言語使用者が得る心的表象を記述しようとする表象的(representational)意味論の観点から、純粋に意味論的な内容が確保される可能性を探る(三木)。こうした三つの観点からのアプローチによって、発話の解釈プロセスにおける意味論の役割に再考を促す。